

## リレートーク～白金ボラセンから広がる輪～

全面ガラス張りで横浜校舎の中央に位置する建物の1階に構える横浜ボランティアセンターとは対照的に、白金ボランティアセンター（以下、白金ボラセン）は窓がなく、半地下のような雰囲気の本館1階部分に位置している。したがって、学生たちから「気軽に立ち寄りにくい」という意見をよく聞いていた。しかし、白金ボラセンを「夢を語る場所」にしたいという想いもあった。また、白金校舎は昼休みが40分と短く、食堂は学生で混雑するという状況があった。このような白金ボラセンと大学の状況をずっと認識していたのだが、なかなかそれを「コーディネーション」するアイデアが思いつかなかった。それを2009年度のセンター拡張（詳しくは2009年度報告書を参照）を機に少しでも改善できればという思いで始めたのが、白金ボラセンの拡張リニューアル記念イベントとしてスタートした「リレートーク～白金ボラセンから広がる輪～」である。具体的には、お昼休みの時間に、学生を始め、学内教職員や学外の様々な方々に30分という時間を好きに使って発表していただき、発表しない人々はランチを食べながら耳を傾けたり、時には一緒に議論したりする、というものである。聴衆は自身の都合で自由に入退室可能である。また、発表内容もボランティアに特化したものでなくていい。学生の発表では、自身のボランティア体験を話した学生もいれば、旅の報告や好きなマンガについて熱く語った学生、報告会に来れなかった人にも聞いてほしいと、日米NPOボランティア体験学習プログラム（詳細は本報告書12～15ページ参照）での個人発表を披露した学生、ボルネオスタディーツアー（詳細は本報告書16～19ページ参照）に参加し、次年度の参加時はぜひマレー語を話したいからと「マレー語講座」を毎週開いた学生、授業で聞いた内容で抱いたささやかな「疑問」を、学部や立場を越えて投げかけた学生など、バラエティに富んでいた。また、学生スタッフやサークルによる、イベントや団体説明があったり、地域の運動会でデモンストレーションをする学生たちの「ラジオ体操講習会」といった、スピーチ以外の発表もあったりした。その他、学生たちが参加したイベントや、地域のケーブルテレビで放送された番組、その他関わりのあるNPOスタッフが出演しているテレビ番組のDVD上映会も開催された。センター拡張時、壁と窓のない白金ボラセンの特性を活かし、奥の壁は物を置かず、プロジェクター投影を考えて白壁にしたのだが、おかげで投影時のコントラストは抜群だった。そしてこの様子はセンターの外からもよく見え、通りがかりの学生がのぞきこんだり、ふらっと入ってきたりすることもあった。学外者の参加では、こまどり社によるすきま展2（詳細は本報告書47ページ参照）記念ギャラリートークショーや、港区の団体職員による地域イベントの紹介などがあった。学内教職員では今年度から着任した当センターのセンター長とセンター長補佐が発表した。2010年度は1月現在までに33回実施し、スケジュールはカレンダーに書き込むデザインのページを作って事前にホームページにアップし、白金ボラセン前のイーゼルに貼り出した。来年度も白金ボラセンを、多様な人々が多様な内容で夢を語り合い、出会う場所にすべく、来年度も本企画を継続し、参加者を募りたい。そして、白金ボラセンの活用方法の一つとして積極的にアピールしていきたい。

（李）

## 白金校舎学生スタッフホームページについて

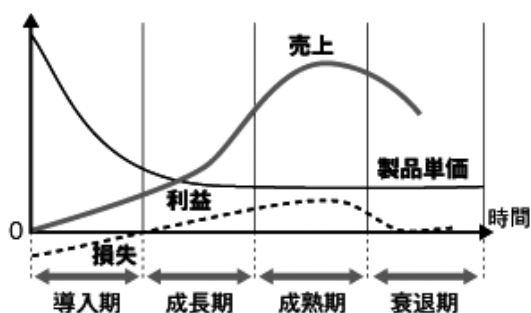
様々な方々のご理解とご協力、そして学生たちの日々の地道な活動の蓄積の結果として、白金ボランティアセンター（以下、白金ボラセン）は年々活動の幅を広げてきた。そんな白金ボラセンの様々な事業を支えてくれている、一番のパートナーであり、仲間は学生スタッフである。現在、白金ボラセン学生スタッフはプロジェクトという名称のもと、6つの活動を展開しているが（詳細は本報告書31～42ページを参照）、これらは日々変化と発展を続けている。このような状況の中、改めて現在のホームページを見直し、改善点を検討する必要があるという議論が起こった。また、白金学生スタッフは卒業学年の学生たちがいること、そしてどの学年のタイミングでも受け入れていることから、毎年半数程度新たな顔ぶれがそろろう。このような学生たちに、限られた時間と環境の中で学生スタッフの活動内容やポリシーを伝えることは容易ではない。しかし、ホームページのリニューアル作業を行うことによって、これらをうまく「コーディネート」できるのではないかと考えた。また、ホームページは何らかの情報を発信する媒体であるが、情報の伝達は一方通行にならざるを得ない。したがって、発信者（作成者）は発信内容をよく理解し、閲覧者の立場で何度も客観的に見直すといった、2つの立場の往復を繰り返さなくてはならない。それは学生スタッフの指導において重視している、他者への貢献のためには己をよく知り、己を客観的に見ることのできる力と、全体状況を把握する力の育成にもつながる。以上のような状況と目的をもとに、今年度、白金ボラセン学生スタッフのページの大幅なリニューアル作業が始まった。学生たちはまず、現在のページを検討し、必要なもの、削除すべきもの、新たに加えるべきものの内容をまとめたたたき台を作成した。それをもとに、コーディネーター（筆者）と白金ボラセンのウェブ担当スタッフの3者で協議を行い、内容と技術の両面から議論し、内容をブラッシュアップしていった。当然ながら、ホームページは文字や文章だけではなく、デザインや構成も複合的に合わさったうえでの情報発信方法である。したがって、アイコンなどのデザインや写真、レイアウトについても、「なぜこうするのか？」という問いに答えることを求めた。学生たちは予想以上に様々な目を持つことが求められ、そのバランスを見出すのに苦心していた。しかし、自身の日々の活動を、なんとか形にして発信したいというモチベーションと、他の学生たちと切磋琢磨ができる環境による刺激（ページトップにプロジェクト名を共通のフォントで記載すること以外、全て自由とした）もあり、完成のスピードは異なるものの、何とか年度内に全てのリニューアルが完成する予定である。そして白金ボラセンとしても今年度内にリニューアルの準備を進め、学生スタッフに関する内容とそれ以外の内容を整理し、より分かりやすく白金ボラセンを理解していただけるよう工夫した。今年度特に力を入れた「活動ニュース」という日々の活動の発信と更新の甲斐あってか、白金のページを開設した2009年5月29日より設置しているカウンターも、ボランティアセンターホームページの奥にあるにも関わらず6000を超え、地域の方々からも楽しく閲覧しているとおっしゃっていただいている。今年度整えたホームページを、来年度存分に活用したい。

（李）

## 2010 年度を振り返って

筆者がセンターに着任して早くも5年が過ぎた。そして現在の白金ボランティアセンター（以下、白金ボラセン）の基幹事業となっている学生スタッフと学外の方々との3者連携プロジェクトを始めて3年が経過した。時間の量を考えると焦燥感に苛まれるが、時間の質を考えた時、多くの困難や壁に直面しながらも、仲間たちと共に乗り越えてきた日々と、その蓄積の結果として現れた変容と成果に誇らしい気持ちになる。このような結果と形が見え始めたのは、ちょうど1年前に実施した、秋学期（後期）学生スタッフ研修会での2009年度総括の時だったように思う。そして、筆者の着任以来4年間、共に歩み活動の基盤を築いてくれた学生スタッフたちが卒業したこともあり、個人的にも2010年度は新たな局面と展開があるだろうと感じていた。ジョエル・ディーンが1950年に提唱したプロダクト・ライフサイクルの理論から例えると、今年度は成長期と成熟期の狭間に該当すると考えた。つまり、ある程度見出せた「成果」に甘んじるという選択も可能であり、その結果活動が陳腐化する可能性も孕んでいるとみなすことができる時期になるのではないかと予想した。さらに、特に導入期においてはまだ目に見える「成果」を発信したり、示したりすることが難しいので、悩みの種にはならないが、ある程度の「成果」や「カタチ」が現われ出すと、学内外問わず、多くの団体や個人に関心を示していただくようになり、実に多様な出会いが発生する。しかし、一方で私たち自身も、成熟期にさしかかろうとしているタイミングであれば、成長が鈍化し、結果が頭打ちになっているのではと焦りやすくなる可能性も考えられる（表1参照）。

表1. プロダクト・ライフサイクルの概念図



出典：野村総合研究所 HP (<http://www.nri.co.jp/index.html>)

つまり、チャンスとリスクが紙一重に混在する時期に突入するのである。したがって、活動内容を更に頻繁に見直し、より具体的に焦点を定め、ぶれないポリシーを仲間と共有しながら、現場の中におけるニッチ戦略を自ら見出していくことが必要となってくる。このような問題意識を2009年度末に感じながら今年度を迎えたが、2010年度が始まってから、このような問題意識は自然に白金学生スタッフら

<sup>1</sup>参考文献：野村総合研究所 編著「経営用語の基礎知識（第3版）」2008 ダイアモンド社

との間で共有されていき、よく話題にも上るようになったが、実際の現場は生モノであり、当然ながらシナリオ通りに進まないことのほうが圧倒的に多かった。しかし今年度は、特に学生スタッフプロジェクトにおいて実に多くの成果と発展、変容を遂げることができた。新たに6つめのプロジェクトとして立ち上がった「山黒」では、「ばれ☆コレ 2010」の参加を通してプロジェクトの主旨である知的障がい者の余暇支援活動に関わる学生たちのネットワーク作りの素地を作ることができたり、白金校舎近隣に位置し、日ごろ学生たちがボランティアに伺わせていただいていたNPO法人トータルヒューマンネット21「グループホームレインボー白金」の皆様とも、チームとして一緒に参加していただいたことにより一層交流を深めることができた（詳細は本報告書41～42ページ参照）。また、このイベントはボランティアセンターも共催として関わったことで、イベント会場の提供をはじめ、イベント全体に積極的に関わらせていただくことになった。主催団体であるNPO法人ばれっと、共催団体である内閣府NPO法人クーピーアートファッショングループをはじめ、多方面の多くの関係者の皆様と協働させていただく機会を賜ったことは、白金ボランティアセンターの今後の活動においても、多くの可能性を与えていただいたと感じている。また、「志田町倶楽部明治学院大学学生チーム」は「しろかねサラダ」として新たなスタートを切ったが、新たに何らかの活動を加えたりしたものではない。今までの活動を通じた蓄積とそれに伴いバラバラに存在していた白金地域での活動をまとめただけである（詳細は本報告書31～32ページを参照）。白金地域と一言で言っても住所も高輪、白金、白金台と微妙に異なったり、それぞれの地域性があったりとバラエティに富んでいるのだが、大学・学生という立場だからこそそれぞれに関わらせていただいたり、活動させていただけた部分もあるかと感じている。今後も、地域に対する今までの感謝の気持ちを忘れず、これらの異なる魅力を大学・学生という立場から紹介させていただいたり、出会いの場作りとしての役割を少しでも担えたりできたらと考えている。そして今年度より新たなフィールドで活動を再開させた「MG☆SUZU」は、3年越しの夢だった学内展示を実現することができた。それは、プロジェクト開始時より、常に見守り続けてくださった俳人花田春兆先生と、前ボランティアセンター長補佐である茨木尚子先生の存在なくしては実現することはできなかった。今年度からプロジェクトに参加してくださった港区立特別養護老人ホーム白金の森と、特別養護老人ホーム麻布慶福苑の利用者とご家族の皆様、スタッフの皆様にも心から感謝申し上げます。そして今回の学内展示は、特定非営利活動法人風の子会ともつながりをつくるきっかけにもなった。同様に「MGパール」もプロジェクト開始から3年目の今年、念願だった現地ボルネオに学生たちと訪れることができた（詳細は本報告書33～34ページを参照）。スタディーツアーを催行できたことにより、学生たちのモチベーションは目を見張るほどあがり、新たな意欲的な学生たちとの出会いにもつながった（詳細は本報告書16～19ページを参照）。何より、今回の現地訪問に、ずっと根気良く一緒に歩いてくださった、NPO法人ボルネオ保全トラストジャパンの皆様とご一緒できたことは非常に感慨深く、意義深いことであった。「COS」も新たな局面を開くことができた。昨年度まで、学生スタッフはプロジェクトに囚われ、他のプロジェクトや学生ス

スタッフとの連携が不足しているという課題があったのだが、COSが各プロジェクトに参加している学生スタッフやそれ以外の学生たちも巻き込んで、「種まき」と称した、広報活動と街歩きとネットワーク作りを兼ねたクリーン活動を始めたのである。それによって新たな学内外のつながりができたり、活動や分野を超えた学生の連携が次々と実現したりして、大きなイベントが続いた今年度を無事乗り切ることができた（詳細は本報告書39～40ページ参照）。特に、港区高輪地区総合支所の皆様にはあたたかく迎えていただき、ご支援を賜った。「MGnatural」では、卒業生や日ごろお世話になっている学外団体を積極的に紹介させていただき、記事の内容の充実を図った（詳細は本報告書37～38ページ参照）。他にも昨年に続き、そして昨年度よりも大きな会場で、「白金合コン」も開催することができた（詳細は本報告書27～28ページ参照）。以上、学生スタッフを中心に白金ボラセン報告の筆を進めたが、それには理由がある。学生スタッフらは「人と人をつなぐ役割を担う」ことを共通のミッションに掲げているが、彼らは、これらのプロジェクトを通して学生スタッフではない、他の学生たちをインスパイアしていくという、ピア・エジュケーションの重要な担い手として活躍しているのである。実際、プロジェクトの様々な活動を通して、多くの学生たちがボランティア活動に参加してくれた。それはイベント当日だけではなく、白金ボラセンが推奨している「空きコマボランティア」というスタイルでの関わりが圧倒的に多かった。そうした日々の小さな関わりを経て、今までボランティアに関心や関わりがなかったり、ボランティアセンターを利用したことがなかった学生たちが、白金ボラセンに出入りするようになったり、トークイベントに参加するようになったり（詳細は本報告書48ページ参照）、時にはホームページの活動ニュース（詳細は本報告書49ページ参照）に記事を掲載したりするようになっていった。今年度、学生スタッフは1年生から4年生まで19名であり、横浜校舎在籍の学生たちも含まれている。ボランティアセンターは学生の課外活動を通じた教育支援を行う部署であることから、教員と学生といったような強力な関係性はない。また、高校までとは違い、学生たちは毎日大学に来るわけでもなく、授業の取り方も学生によって異なる。このような状況の中、筆者ができることは非常に限られているが、19名の学生たちのわずかな隙間時間を活用しながら、彼らと信頼関係を築き、プロジェクトを展開している。そして彼らにはニーズに対応して行動するプレイヤーと、全体状況を見渡し黒子として行動できるマネージャーの2つの役割の経験と往復を求め、この実践に必要な指導を行っている。

以上、今年度享受できた豊かな収穫と成果について報告したが、これらはあくまでもプロセスの帰結であり、結果として示された変容が「成果」としてとらえることができたものである。「成果」だけを切り取ると、非常に「美しい」のだが、ここに辿り着くまでの実際のプロセスは困難と失敗の連続である。しかしこのプロセスこそボランティアセンターが担う課外活動を通じた教育支援の現れであり、私たち教職員にとっても、学生たちにとっても、忘れてはならない、味は苦いが非常に効力のある財産である。今年度卒業していく学生のうち、チーフを務めた学生が昨年（2009年度）の研修会でのチーフの引き継ぎの際、学生スタッフらに語った言葉が思い出される。「学生スタッフにとって重要なのは義務と責任を

負うことです。義務と責任は重くて面倒な印象がありますが、義務と責任なくして、本当の“充実”や“楽しさ”はありません。」本来ならば、筆者が伝えなくてはならないところだが、このように学生たちは日々の協働を通して、着実に仲間として成長し、確実に頼もしい存在となっている。本報告書でも、細かい内容については、学生たちがそれぞれ分担して執筆しているため、筆者がこれ以上加筆することはない。しかしこの学生の言葉に少し補足するならば、義務と責任の追及は、当然ながら自分自身に向けたものであり、その次に他者に対する義務と責任の追及が発生するということである。本学の教育理念は「Do for Others（他者への貢献）」であるが、今年度は前述したような問題意識をもってスタートしたことや、結果として成熟期にさしかかりつつも、多様な出会いや経験を伴いながらもまだ成長できたことによって、他者へ貢献するということはどのようなことなのか、「他者へ貢献」する過程は自分を知るプロセスでもあることを、学生たちと深く考えさせられた1年であった。ボランティアは他者に何らかの「善い」行為をすることというのが普遍的価値観として見做されているが、自分にとって「善い」行いは他者にとっても決して「善い」とは限らない、というボランティア活動における盲点を幾度となく考えさせられた。他者に対する行為や言動を通して、自分自身も問われている。そのような無意識なカルマを自分自身も孕む可能性があることを常に意識していくことを今後も肝に銘じたい。

ボランティアセンターのリーフレットをリニューアルした2009年3月、筆者は白金ボランティアセンターの紹介の冒頭に「夢を語る場所として」という見出しをつけた。それから2年が経ち、今年度を振り返ってみると、白金ボラセンは、「夢を語る場所」から「夢を実現する場所」へ変貌を遂げた、もしくは遂げつつあると総括できよう。そしてそれは一重に、日々汗を流してくれた仲間である学生スタッフをはじめとした学生の皆さんと、惜しめない理解と協力を、変わらず注いでくださった学外の様々な団体・個人の皆様のおかげである。今年度（2010年9月）で5回目の参加となった、スリランカ大使館が主催する「スリランカフェスティバル」には、今回も50名を超す学生たちが参加させていただき、学生が伺い始めて4年目の林試の森クリニックも、引き続きあたたかく学生たちを受け入れてくださっている。その他も、たくさんの方々のご理解とご支援、ご協力を賜った。字数に限りがあるため、全ての方々をご紹介することができないが、心から感謝申し上げる。

2011年度は、本稿で明らかにした学生スタッフの役割と特性を更に活かし、発展させることができる教育支援の在り方について検討していきたい。現在、白金ボラセンを取り巻く学生は、「コア（学生スタッフ）」と「メンバー（学生スタッフではないが、プロジェクトメンバーとして活動している）」、「どちらでもない（タイミングが合うときのみ来室・参加する）」の、大きく3パターンに分かれているが、「コア」と「メンバー」の棲みわけ、もしくは棲み分ける必要のないロジックの整理が必要であるという声が、学生たちの中で提議されている。意見は、次のステップへのチャンスへの合図である。来年度も白金ボラセンの成長期が続くことも視野に含め、学生たちと一緒に考え、成長していきたい。（李）